

広島市植物公園が保有するサクラソウ濡燕に見られた多芽体状の変異

山本晃弘・山森千帆

はじめに

広島市植物公園（以下、植物公園）では、開園以来サクラソウ *Primula sieboldii* E.Morren の収集及び保存・記録を継続して行っている（河野・石田 1982, 河野 1983, 井上ほか 2013）。サクラソウは、品種によって変異が見られやすいものもあることから（鳥居 2006）、植物公園では、品種保存を行っていくために、変異が現れたものを除去するなどして対応している（山本・向井 2022）。

濡燕は、野生のサクラソウに近い品種で、花弁の裏が淡桃色、表は底紅で目があり、花茎は長く伸びるなどの形態的特徴が知られている（鳥居 2006）。本品種の変異については、芽の形状や茎の帯化、帯化個体の花数増加について報告があったが（山本・向井 2022, 山本・山森 2024）、この度新たに多芽体状の変異を確認したので記録する。

方法

2023 年 12 月、濡燕の芽分け・植え付けを植物公園栽培温室において実施した。鉢から取り出した根茎を水洗したのち、芽分けを行った。その際、芽を手で容易に折り分けることができる通常個体に対し、芽が扇形に変形して分けることが困難な変異個体を確認した（図 1）。これらの比較として、通常個体（ $n=6$ ）と変異個体（ $n=4$ ）の芽の最大幅を比較した。統計解析として、Student の t 検定を用いた。

その後、通常個体と変異個体を分けて植え付けを行った。植え付けには、黒色の 15 cm ビニールポットを用意し、底石を約 1.5 cm 敷いたのち、マグアンプ K 中粒 2 g を混合した用土（体積比：赤玉土小粒 3・ボラ土小粒 3・鹿沼土小粒 3・腐葉土 1）に植え付けた。植え付け後は、乾燥させないように灌水を行った。2024 年 5 月、鉢の掘り上げを行い、通常個体と変異個体の様子を記録した。

結果

結果を表 1 に示す。冬期における芽の最大幅の平均値は、通常個体では $7.2\text{ mm} \pm 0.7$ 、変異個体では $41.9\text{ mm} \pm 9.9$ となった（図 1、表 1）。変異個体は通常個体に比べて有意に芽の最大幅が大きいことが示された（Student の t 検定、 $p < 0.01$ ）。開花期における観察として、通常個体に対して変異個体は、葉芽および花芽の数が多くなっている印象を受けた（図 2）。

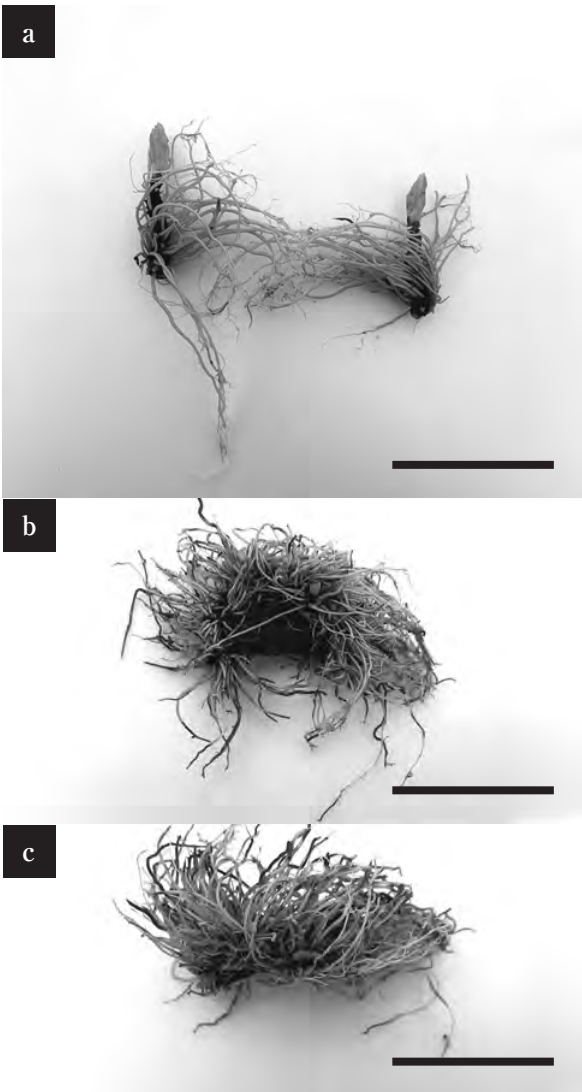


図 1 冬期におけるサクラソウ濡燕の芽の形状（2023 年 12 月 10 日）
a：通常個体 b：変異個体（真横から撮影） c：変異個体（真上から撮影） スケールバーは 5 cm を示す

表 1 通常個体と変異個体間における芽の最大幅	
最大幅平均*	
通常個体（ $n=6$ ）	7.2 ± 0.7
変異個体（ $n=4$ ）	41.9 ± 9.9

* 数値は平均を、 $\pm$ は標準誤差を示す

** Student の t 検定, $p < 0.01$

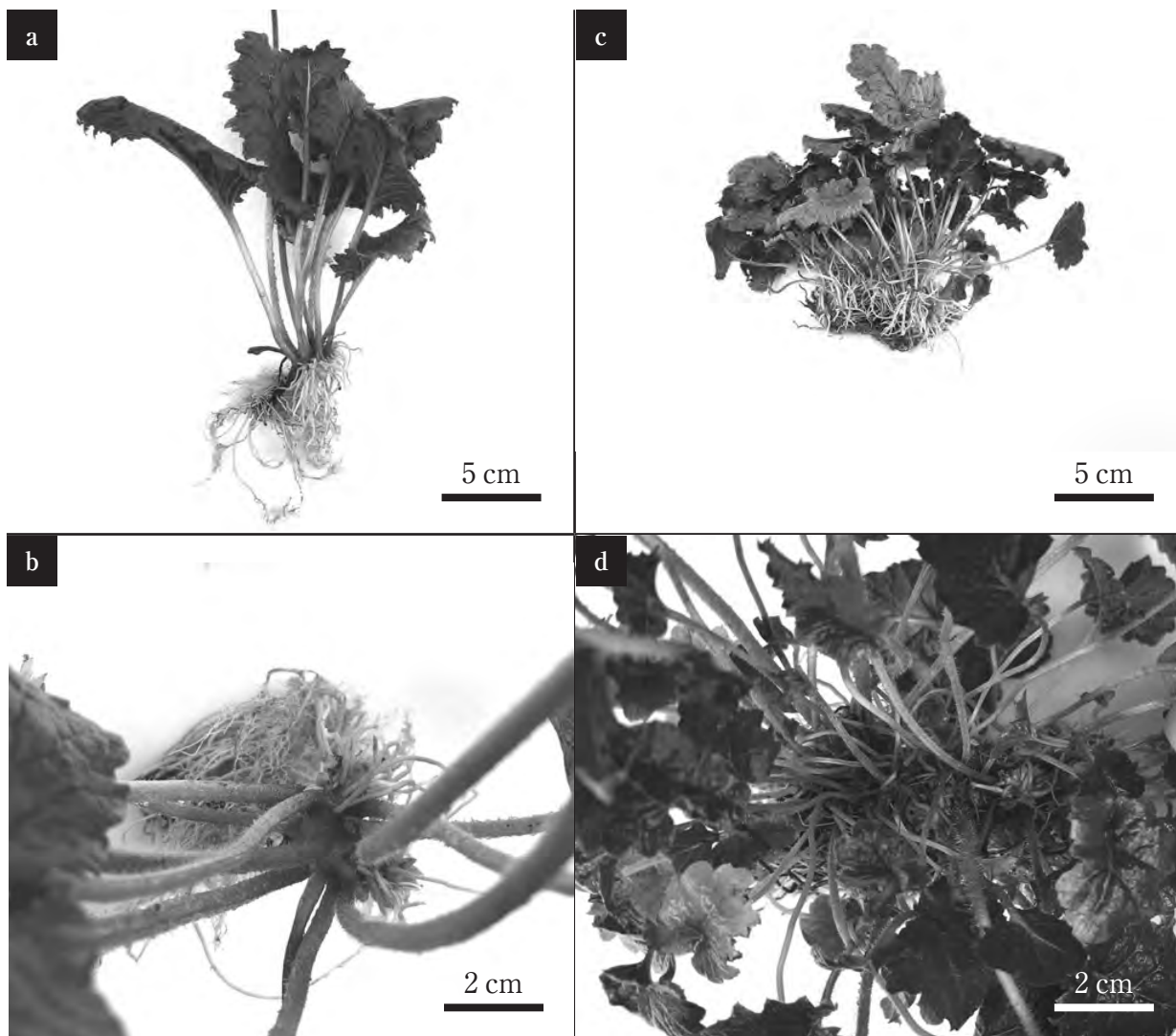


図2 開花期におけるサクラソウ濡燕（2024年5月10日）

a：通常個体（真横から） b：通常個体（真上から） c：変異個体（真横から） d：変異個体（真上から）

おわりに

本稿では、濡燕において、芽に多芽体状の変異が出現することを記録した。これまでに濡燕では、花茎の帯化および芽の形状変化（山本・向井 2021）、帯化個体の花数増加（山本・山森 2024）などの変異が報告されている。加えて濡燕には類似品種が複数あるとされており（鳥居 2006）、他の品種においても何らかの変異が発見される可能性もあるため、今後も情報を集積していくことが望まれる。

引用文献

井上尚子・荒木大蔵・豊永哲夫 2013. 広島市植物公園が保有するサクラソウ園芸品種の開花時期について. 広島市植物公園栽培記録 34：11-13.

河野清人・石田源次郎 1982. 日本サクラソウの栽培用土について. 広島市植物公園栽培記録 3：4.

河野清人 1983. 高冷地産サクラソウの夏越しについて. 広島市植物公園栽培記録 4：1.

鳥居恒夫 2006. 色分け花図鑑 桜草. 85pp. 学研教育出版, 東京.

山本晃弘・向井昭彦 2021. 広島市植物公園が保存するサクラソウ「濡燕」にみられた変異について. 広島市植物公園栽培記録 42：21-22.

山本晃弘・山森千帆 2024. 広島市植物公園が保有するサクラソウ「濡燕」の通常個体および帯化個体間における花数比較について. 広島市植物公園栽培記録 45：11-12.